

活躍夢見た舞台再び

第50回 社会人野球 日本選手権

主催・毎日新聞社 日本野球連盟
共催・大阪市

活躍を夢見たマウンドに
もう一度上がる時が来た。
プロ野球・オリックスに入
団したが、大成しないまま
昨シーズン限りで退団し
た。それから約1年。かつ
ての所属球団の本拠地・京
セラドーム大阪で、28日の

社会人野球日本選手権の開
幕戦に臨んだ。

和歌山市内から車で約1
時間。和歌山県有田市郊外
にあるクラブチーム「マツ
ゲン箕島」の本拠地グラウ
ンドで10月上旬、主により
1Fを任される中田惟斗投
手(24)は黙々と汗を流して
いた。

最速は153キロ。大阪編
歴高時代の2019年秋、
オリックスから育成3位で
ドラフト指名を受けた。2
軍の試合で京セラドームで
投げ、1軍での活躍を目指
したが、ひじの故障もあり

24年オフに戦力外通告。一
度も支配下登録されること
はなかった。手術したひじ
の傷が癒え、球速も150
キロを連発している最中のこ
とで「クビはないやろう」
と語っていた。驚いた。

当時23歳。「純粋に野球
が好き。まだまだプレーで
きる」。オリックスの球団
スカウトの勧めもあって今
年から出身地、和歌山で現
役を続ける道を選んだ。

マツゲン箕島は1970
年代に春夏の甲子園を4度
制した地元の名門高OBら
で創立した箕島球友会が

元オリックスマツゲン箕島・中田惟斗投手

力投するマツゲン
箕島の中田惟斗投
手—京セラドーム
大阪で28日、中川
祐一撮影



前身で、スーパーチェー
ン「松源」(和歌山市)が支援。
選手は早朝から店舗などで
業務に携わり、午後からは
暗くなるまで野球に打ち込
むハードな日々を送る。
中田投手もナスやピーマ

ンなどの農産物を収穫した
り、鮮魚をさばいたりとい
れない作業に悪戦苦闘する
が「なじんできたのかな」
と笑みを浮かべる。かつて
のトレーニング環境とは異
なるが、プロ選手が配信す
る動画でストレッチの方法
などを研究し、けがをしな
い柔軟性を身につけた。

ただ、アマチュア野球も
甘くない。日本選手権への
出場権を懸けた9月の全日
本クラブ野球選手権。1回
戦は6回から登板し、先頭
打者に本塁打を浴びるなど
1死も取れずに降板した。
西川忠宏監督は成長の糧と
どらえつつ、プロの厳しさ
を知る中田投手について
「パフォーマンスの高さは
チームの刺激になってい
る」と評する。

クラブ選手権ではその
後、準々決勝、決勝で無失
点の好投援を見て日本選
手権の切符をつかんだ。

28日の東京ガス戦は同点
の6回にマウンドに上がっ
た。走者を背負ったが、ス
タンドの大声援に後押しさ
れ、150キロ近い速球を軸
に連続三振でピンチを切り
抜けた。しかし7回、先頭
から連続四球を与えたこと
で降板。その後チームは
決勝点を奪われ、「コース
を狙いすぎてしまった」と
試合後に悔しさを見せた。
それでも、「(トーナメン
トは)一球一球への執念が
違う」とアマチュア最高峰
の舞台を楽しんだ。

【藤木俊治】